

# 親密な対人関係の形成要因に対する 帰属過程について

飛 田 操

## 問 題

多くの研究者によって青年期における恋愛体験の重要性が主張されている。例えば、エリクソン（小比木訳編，1970）は、若い成人期は、他の人との友情、愛や性的親密さと、自分自身に対する親密さを獲得する時期であり、これらの親密さを獲得できない場合には、人は拒否的になり、孤立し、情のかよわぬ、型にはまった人間関係しか持とうとしなくなると考察している。また、ハヴィガースト（荘司訳，1958）も、同年令の男女との洗練された親しい関係を発展させることが青年期の男女の最も重要な発達の課題のひとつであることを示している。さらに、Sullivan（1953, Buhrmester & Furman, 1986より引用）は、青年期前期は、性的な欲求が顕著となる時期であり、異性との間で形成されるパートナーシップがこの時期における最も重要な『鍵となる関係（key relationships）』であることを示している。

このように、異性との親密な関係の形成の重要性が提起されてはいるものの、実際には、すべての青年期の男女が異性との親密な関係を形成あるいは維持しているわけではない。異性との親密な関係を形成できない彼らは、青年期の発達課題を解決できないのだろうか、あるいは、情のかよわぬ、孤立した人間なのだろうか。

青年期の男女にとって恋愛関係は最も主要な関心事のひとつであり、また、それだけに青年期の悩みの主要な原因でもある（松井・戸田，1984）。そのなかでも、異性との親密な関係を形成できない、あるいは、形成したことのない青年男女は、その理由をどのようにとらえているのだろうか。

本研究の第一の目的は、これまで、一度も恋愛体験を持ったことのない男女大学生を対象に、彼らが「恋人が存在しない」理由をどのように位置づけているのか、その理由の構造を明らかにする事を目的としている。

ところで、例えば、Ickes & Layden（1978）は、自尊心の低い人は高い人に比べて物事の成功の原因を外的な要因に、そして、失敗の原因を内的な要因に帰属させる傾向が強いことを示している。また、Anderson, Horowitz & French（1983）は、孤独感の強い人は、他者とのつきあいがうまくいかないことに対する原因を自分自身の中にある内的で、安定した欠点に帰する傾向が強いことを見いだしている。さらに、Anderson & Arnoult（1985）は、生活の中で生じる出来事の原因を自分が統制できない要因に帰する傾向の強い人は、特に内気で、孤独で、抑うつ的になりがちであることを見いだしている。

本研究の第二の目的は、恋愛体験のなさや密接に関連すると考えられる孤独感の強さや、自尊心の程度と、「恋人が存在しない」理由づけの仕方との関連を検討することにある。上述の結果は、恋愛体験のなさに対する帰属のしかたと孤独感や自尊心のあいだの密接な関連を示していると考えられるからである。

## 方 法

【調査対象者と調査方法】 国立大学生111名（範囲：18—22才）に対し、親密な対人関係についての質問紙を配布し、このうち、「現在・過去を通して『恋人』は存在しない」と回答した39名をここの調査対象者とした（飛田，1989参照）。この39名に対して、「あなたに恋人が存在しない理由」、および「一般に恋人ができない理由」のそれぞれについて自由に記述することを求めた。また、同時に、孤独感尺度（永田，1989）と自尊心尺度（山本・松井・山成，1982）への評定を求めた。

孤独感尺度は、「日々の生活に張りがある」、「日々はつらつと生きているという実感がある」、「自分はひとりぼっちだと感じることもある」、「希望に満ちた生活だと感じることもある」、「もっと意義のある生活がしたいと思うことがある」、「漠然

とした不安をおぼえることがある」、「自分をかけがえのない存在だと実感することがある」、「ふとわびしい気持ちになることがある」、「自分の生活は充実していると実感することがある」、「どことなく気が晴れないことがある」の10項目からなる。この尺度への評定は、「まったくない」から「非常にある」までの5段階評定で、「まったくない」を1点とし、「非常にある」を5点として得点化した。

この孤独感尺度は、因子分析により2つの次元からなることが示されている(飛田, 1989)。第一因子は、「日々はつらつと生きているという実感がある」、「希望に満ちた生活だと感じる」という項目に高い因子負荷量を示すもので、「充実感のなさ」の因子と呼ぶ。第二因子は、「ふとわびしい気持ちになることがある」、「自分はひとりぼっちだと感じる」という項目に高い因子負荷量を示すもので、「漠然とした孤独感」の因子と呼ぶ。

また、自尊心尺度は、「自分を失敗者だと感じる人が多い\*」、「自分をもっと尊敬できたらと思う\*」、「自分にはたくさん長所があると思う\*」、「自分はだめな人間だと思うことがときどきある\*」、「何をしてもたいていの人と同じ程度にはうまくできる」、「自分が役立たずな人間だと感じる」という項目に高い因子負荷量を示すもので、「私には自慢できるようなものはほとんどない\*」、「私は少なくとも他の人と同じ程度には価値のある人間だと思う」、「自分に大体満足している」、「自分を好ましい人間だと思っている」の10項目から構成されている。この自尊心尺度への評定は、「あてはまらない」から「あてはまる」までの4段階評定で、「あてはまらない」を1点とし、「あてはまる」を4点として得点化した。ただし、\*印は逆転項目である。この自尊心尺度は一次元であることが確認されている(飛田, 1989)。

調査に際して、社会的望ましきなどによる影響をできるだけ排除するため、匿名で回答が行われ、回答者各個人のプライバシーが明らかにされないような配慮がなされた。

### 結果と考察

**【内容分析】** 調査対象となった39名のうち、回答不備な6名を除き、分析の対象としたのは、

男性15名、女性18名の計33名のデータであった。

分析の第一の手續きとして、この33名による記述を、分析の基本的単位である単位に分割した。この単位は、ひとつの記述のなかにただひとつの理由だけが存在するように回答者の記述を分割したものであり、例えば、「ぼくがチビで、眼鏡をかけているから」という恋人ができない理由の記述は、「ぼくがチビだから」という単位と、「ぼくが眼鏡をかけているから」という単位というふたつの理由の単位に分割されることになる。この分割の結果、162の単位が構成された。

男性回答者が記述した平均単位数は、4.80(範囲: 1-12)、女性回答者が記述した平均単位数は、5.00(範囲: 2-11)であり、この両者の平均のあいだに有意な差は認められなかった( $t < 1$ ,  $df = 31$ ,  $n.s.$ )。

分析の第二の手續きとして、心理学の専門家2名が、この162の理由の単位すべてを包括することを目的としたカテゴリー・システムを作成した。2名がそれぞれ独立にカテゴリーを設定した結果、ほぼ同一のカテゴリー内容となったので、両者が協議してカテゴリーを調整し、カテゴリー名の決定、カテゴリー内容の定義を行った。

その結果、表1に示した「消極性」、「意図」、「理想の高さ」、「自信のなさ」、「社会的望ましき(性格)」、「社会的望ましき(容姿)」、「社会的望ましき(その他)」、「未発達性」、「環境・機会」、「社会構造」、「片思いと未経験」、そして、「コミュニケーション能力・技術」の12のカテゴリーが設定された。

第三の分析手續きとして、研究目的を知る1名と、研究目的を知らない3名の計4名の判定者が、162の単位数のすべてをこのカテゴリー・システムへ分類する作業を行った。分類の結果、4名の判定者のあいだ判定の一致率は、.75から.82の範囲にあった。このことから、このカテゴリー・システムへの分類は十分に信頼できるものであると考えることができよう。この結果に基づき、4名の判定者のうち、3名以上の判断が一致したものを最終的なカテゴリーへの分類の基準とし、2名以下の一致しかみられないものについては、原則として、基準の1名の判定者の分類を採用した。

一人が平均すると何個のカテゴリーを用いて理由を記述しているかを表す指標である平均カテゴリー使用数は、男性が3.20(範囲: 1-7)、女性

表1 「恋人が存在しない理由」についての分類カテゴリー表

カテゴリー	カテゴリー内容
消極性	消極的な性格や、内気、人見知りの多さといった本人の消極的な性格を理由にあげるもの
意図	恋人をつくる気がない、欲しいとは思わない、といった本人の意図、意志を理由とするもの
理想の高さ	本人の恋人に対する理想が高すぎるため、といった理想の高さを理由とするもの
自信のなさ	本人の自分自身に対する自信のなさをその理由としているもの
社会的望ましき(性格)	性格が悪い、ネクラである、強情といった社会的に望ましくない性格を理由としているもの
社会的望ましき(容姿)	スタイル、顔、身長、髪長さ、といった、容姿・容顔が社会的に望ましくないことを理由とするもの
社会的望ましき(その他)	職業、所属、スポーツ能力、所持品、といった特徴が、社会的に望ましくないことを理由とするもの、および、社会的地位の低さを理由とするもの
未発達性	本人の精神的な幼稚性や、幼さを理由としているもの
環境・機会	出身高校が共学ではなかった、とか、異性の兄弟姉妹がいなかった、とか、異性との出合の場が提供されていなかったことを理由とするもの
社会構造	適齢期の男女の構成比率が違う、といった社会システムや人口統計学的な特徴に原因があるとすもの
片思いと未経験	いままで好きな人はいなかったといった、恋人となるべき存在がなかったことを理由とするもの、および、恋人となるべき対象は存在したが、その対象から相手にされなかったこと、すなわち、片思いがみのらなかったことを理由とするもの
コミュニケーション能力・技術	話が下手、話題が豊富ではない、異性を楽しくさせる能力に欠けるといった、本人のコミュニケーション能力や技術の欠如を理由とするもの、

表2 各カテゴリーの使用比率

	男性 (n=15)	女性 (n=18)
消極性	.33	.50
意図	.40	.56
理想の高さ	.07	.11
自信のなさ	.20	.06
社会的望ましき(性格)	.33	.50
社会的望ましき(容姿)	.33	.28
社会的望ましき(その他)	.27	.06
未発達性	.07	.06
環境・機会	.33	.50
社会構造	.07	.00
片思いと未経験	.07	.33
コミュニケーション能力・技術	.73	.22 **

\*\*  $p < .01$ 

が3.17(範囲:1-6)であり、この両者の平均カテゴリー使用数のあいだに有意な差は認められなかった( $t < 1$ ,  $df = 31$ ,  $n.s.$ )。

表2に各カテゴリーの使用比率を男女別に示した。この使用比率が回答者の性によって異なるかどうかを検討した結果、「コミュニケーション能力・技術」のカテゴリーにおいてだけ有意な性差が認められ、男性のほうが女性よりもこの「コミュニケーション能力・技術」のカテゴリーを使用する割合が有意に高いことが示された(イエーツの $\chi^2_{(1)} = 6.68$ ,  $p < .01$ )。

【カテゴリー構造の分析】各回答者が当該カテゴリーを使用して恋人ができない理由を記述したかどうかを1・0型の入力データとし、数量化Ⅲ類による分析を行った。2次元解のカテゴリー・スコアの分布を図1に、また、このときのサンプル・スコアの分布を図2に示した。さらに、これらの結果に対して、メジアン法によるクラスター分析を行った結果、同一クラスターに含まれるものを円で囲んで示した。

図1から明らかなように、各カテゴリーは、2つの軸に対するウエイトのパターンにより、4つのクラスターに分類されることが示されている。

第一のクラスターは、「消極性」、「環境・機会」、「社会的望ましき(性格)」、「社会的望ましき(容姿)」、「社会的望ましき(その他)」、「コミュニケーション能力・技術」、「社会構造」、そして、「未発達性」の8つのカテゴリーが含まれるものである。ほとんどのカテゴリーがここに含まれることから「中心的理由」を示すものと考えられる。

第二のクラスターは、第二軸だけに高い位置にある「理想の高さ」の単一のカテゴリーからなるものである。

また、第三のクラスターは、第一軸に低い位置にあり、「片思いと未経験」、「意図」のふたつのカテゴリーが含まれているもので、「欲しいとは思わないから」恋人が存在しない、あるいは、「望み通りの相手が存在しないから」恋人が存在しないとの理由づけがなされるものである。

そして、第四のクラスターは、「自信のなさ」というひとつのカテゴリーからなるものである。これは、第一軸、第二軸ともに高い位置に位置している。

このふたつの軸が何を表すものなのかは必ずしも明確なわけではないが、第一軸は、「社会的望

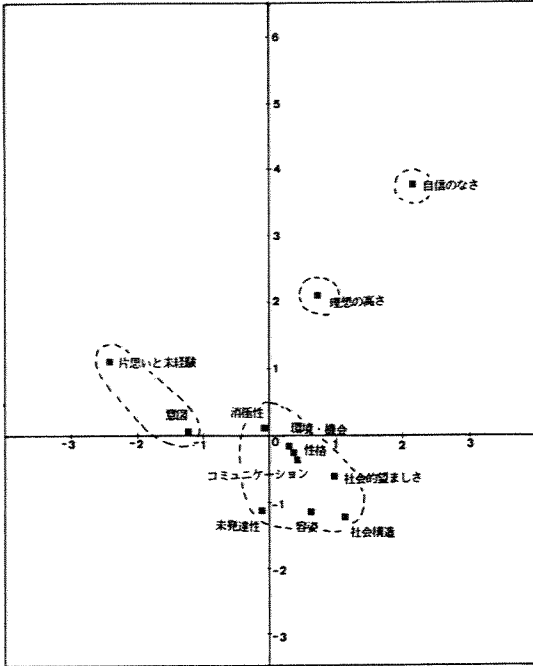


図1 数量化Ⅲ類によるカテゴリー・スコアの分布

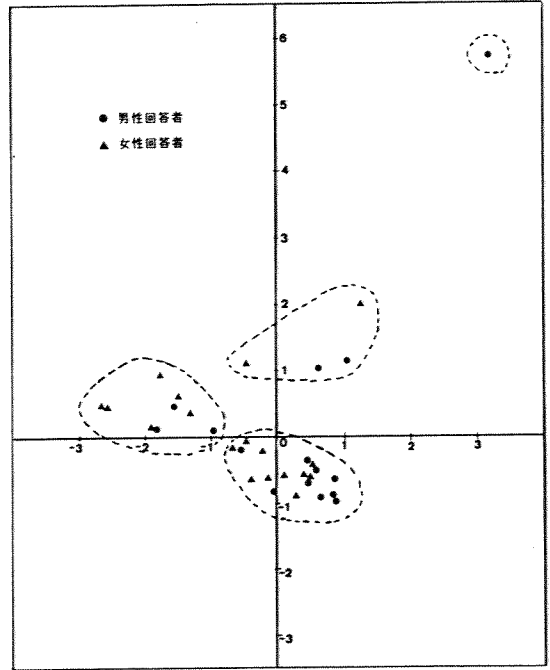


図2 数量化Ⅲ類によるサンプル・スコアの分布

ましさのなさ」対「意図」を、そして、第二軸は、「変動的属性」対「固定的属性」といった関係を表すものと考えられよう。

次に、第一軸に対する個人のウエイトが回答者の性によって異なるかどうかを検討した結果、男性のウエイトの平均 (0.30) と女性のウエイトの平均 (-0.59) のあいだに有意な差が認められた ( $t=2.19, df=31, p<.05$ )。この結果は、男性は女性と比べて、「恋人が存在しない理由」を自分自身の望ましくなさに起因するものとして記述する傾向があるのに対して、女性は男性よりも「恋人が存在しない理由」をより自らの「意志」に基づくものとして位置づける傾向が強いことを示しているといえよう。

一方、第二軸に対しては、男性のウエイトの平均値 (0.17) と女性のウエイトの平均値 (0.13) のあいだには有意な違いは認められていない ( $t=0.09, df=31, n.s.$ )。

また、回答者の2つの軸に対するウエイトのパターンをクラスター分析により分析した結果、図2に示したように、各個人は、4つのグループに分類されることが示された。

第一のグループは、男性8名、女性11名の計19名からなるもので、「消極性」、「環境・機会」、

「性格」、「コミュニケーション能力・技術」、「容姿」、「社会構造」、「未発達性」、「社会的望ましさ(その他)」の中心的理由のカテゴリー群と対応するグループである。ここでは、これを「中心」グループと呼ぶことにする。第二のグループは、男性2名、女性2名の4名が含まれており、「理想の高さ」のカテゴリーに対応するものである。これを「高理想」グループと呼ぶ。また、第三は、「片思いと未経験」と「意図」のカテゴリーと対応するグループであり、男性3名、女性6名の計10名がこのグループに含まれている。これを「意図」グループと呼ぶことにする。最後に、第四は、「自信のなさ」のカテゴリーと対応するグループであるが、これは男性1名だけからなるものである。

【孤独感・自尊心との関連】 図2に示した回答者のグループの違いによって、孤独感の強さが異なるかどうか、そして、自尊心の強さが異なるかどうかを分散分析により検討した。ただし、「自信のなさ」グループは1名だけから構成されており、これを除外した他の3つのグループでのあいだで比較を行った。

その結果、表3に示したように、グループの違いによって、孤独感の強さに違いがみられないこ

表3 グループごとにみた孤独感と自尊心

グループ	中心 (n=19)	高理想 (n=4)	意図 (n=10)
孤独感			
充実感のなさ <sup>a</sup>	20.63	19.75	20.80 $F < 1$
漠然とした孤独感 <sup>b</sup>	5.95	3.00	4.60 $F < 1$
自尊心	25.37	25.50	25.80 $F < 1$

<sup>a</sup> 得点が低いほど充実感が低い

<sup>b</sup> 得点が高いほど漠然とした孤独感が高い

と、また、自尊心の程度にも違いがみられないことが明らかになった(すべて  $F(2, 30) < 1$ , *n.s.*)。

さらに、上の数量化Ⅲ類でみいだされた2つの軸に対する個人のウエイトによって、孤独感の強さや、自尊心の高さがどのくらい予測できるのかを検討するために、各個人の2つの軸に対するウエイト(サンプル・スコア)を説明変数とし、孤独感尺度の「充実感のなさ」と「漠然とした孤独感」、そして、自尊心得点のそれぞれを目的変数とする重回帰分析を行った。標準偏回帰係数と重相関係数を表4に示した。

「充実感のなさ」に対しては、有意な重回帰式が得られ( $r = .43$ ,  $F(2, 30) = 3.44$ ,  $p < .05$ )、第一軸の標準偏回帰係数は有意ではないが( $\beta = -.01$ ,  $F < 1$ , *n.s.*)、第二軸の標準偏回帰係数が有意となっている( $\beta = .43$ ,  $F = 6.69$ ,  $p < .02$ )。

また、「漠然とした孤独感」に対しても有意な重回帰式が得られ( $r = .46$ ,  $F(2, 30) = 3.95$ ,  $p < .04$ )、第一軸の標準偏回帰係数は有意ではないが( $\beta = .17$ ,  $F = 1.03$ , *n.s.*)、第二軸の標準偏回帰係数が負の方向で有意となっている( $\beta = -.46$ ,  $F = 7.64$ ,  $p < .01$ )。

さらに、「自尊心」に対しても有意な重回帰式が得られ( $r = .54$ ,  $F(2, 30) = 6.22$ ,  $p < .006$ )、第一軸の標準偏回帰係数は有意ではないが( $\beta = .19$ ,  $F = 1.43$ , *n.s.*)、第二軸の標準偏回帰係数が有意となっている( $\beta = .47$ ,  $F = 9.19$ ,  $p < .005$ )。

これらの結果から、第二軸へのウエイトが孤独感の強さと自尊心の低さの双方に対してともに大きな予測力を持ち、第一軸へのウエイトは予測力がほとんどないことが示されたのである。このことは、自らの「社会的望ましくなさ」や「意図」に対して恋人ができない原因を帰属することは、

表4 標準偏回帰係数

孤独感	第一軸		第二軸	重相関係数
	第一軸	第二軸	第二軸	
孤独感				
充実感のなさ <sup>a</sup>	-.01	.43*	.43*	
漠然とした孤独 <sup>b</sup>	.17	-.46**	.46*	
自尊心	.19	.47***	.54**	

\*  $p < .05$ ; \*\*  $p < .01$ ; \*\*\*  $p < .005$

<sup>a</sup> 得点が低いほど充実感が低い

<sup>b</sup> 得点が高いほど漠然とした孤独感が高い

孤独感の強さや自尊心の低さには影響がほとんどないが、「理想の高さ」や「自信のなさ」といった変動の可能性のある属性に対してよりも、「容姿」や「社会構造」といった固定的な属性に対して「恋人ができない」原因を帰属すると、孤独感を強く感じることを、そしてまた、自尊心が低くなることを示しているといえよう。

## 討 論

本研究は、「現在・過去を通して恋人が存在しない」男女大学生に対して、彼らが自分たちに「恋人が存在しない」理由をどのように位置づけているのかを中心に検討した。自由記述された理由を整理した結果、これらの理由は、表1に示した12のカテゴリーに分類されることが示された。

表2に示されたように、他のカテゴリーに関しては、記述者の性による使用比率の違いは認められないが、「コミュニケーション能力・技術」のカテゴリーにおいてだけ、その使用比率が女性と比べて男性のほうが有意に高いことが示されている。このことは、「異性を楽しませる」、「話題が豊富である」といった特徴を、女性が「恋人」としての男性に求めている特徴であると男性自身は認知しており、したがって、この能力や技術の欠如が「恋人ができない」最も重要な原因のひとつであると男性は認識していることを示しているといえよう。

これは、現代において、恋愛がゲームとして；あるいは、娯楽的な要素が多いものとしてとらえられていることによるのかもしれない。楠見(1987)は、恋愛中にある女子短期大学生を、その交際目的により分類しているが、恋人が存在すると回答した48名の女子短期大学生のうちの29.17%

一セントが「いまが楽しければよい」から恋人と交際しているという刹那的快樂群に、また、14.58パーセントが恋人がいると「いろいろと便利だから」という道具的功利群に属することを見いだし、娯楽性や道具性を恋愛の相手に求めて交際している女性かなりの割合で存在することを示している。

また、下斗米・清水・山岡(1989)は、友人に期待する特徴として、「その場の雰囲気をごませるような冗談を言う」、「ジョークなど気楽に楽しめる話をする」といった項目に代表されるエンターテイメントの因子が存在することを見いだしている。このエンターテイメントの因子は、友人に対してだけではなく、異性との親密な関係においても期待されるものと考えられよう。さらに、堀毛(1989)は、男女大学生を対象としてデート場面における社会的スキルを調査しているが、そのなかで、「場をしらけさせないような上手なやりとりができる」といった符号化・会話スキルの因子は、男性だけに見いだされるものであることを示している。

これらの結果は、「異性を楽しませる」といった期待が男性に対してだけに求められている特徴であること、そして、この「異性を楽しませる」ことができるかどうか、異性との親密な関係の形成・発展に大きく奇与していることを示しているといえよう。

ただし、実際に女性が男性に「話題の豊富さ」や「異性を楽しませる」能力や技術を求めているかどうかは明かではない。例えば、訖摩(1973)の調査では、女性が結婚にあたって重視する項目は「性格」や「愛情」であること、そして、男性が「社交的」であることよりも「誠実」であることをより好ましい特徴として認識していることを示しているのである。このことは、性役割期待に対して、男性と女性とのあいだで不一致が存在することを示唆しているとも考えられよう。

また、数量化Ⅲ類による分析の結果、必ずしも明確ではないが、「社会的望ましくなさ」対「意図」、そして、「固定的属性」対「変動的属性」という2つの次元が見いだされた。

これまで、一般的な原因帰属の行われかたには、状況的な要因に帰属するか、能力、性格といった特性に帰属するかの「状況」対「特性」という二分法が存在すること、そして、ある行為の行為者

は、その行為の原因をより状況的な要因に帰属させやすいのに対して、その行為の観察者は、行為の原因を行為者の内的な特性に帰属する傾向が強いこと、すなわち、行為者と観察者のあいだの帰属のしかたに差異が存在することが示されてきた(例えば、Jones & Nisbett, 1972)。また、Orvis, Kelley & Buttlar (1976) と Passer, Kelley & Michela (1978) は、親密な2者関係のなかで生じる帰属を分類整理し、パートナーの行動を観察する場合には、「状況」対「特性」の次元は顕著になるが、自分が行為者となる場合には、「状況」対「特性」という次元よりも「その行為を意図的にしたものかどうか」という次元が顕著になることを示している。

これら従来の研究の知見は、本研究で見いだされたカテゴリーや数量化Ⅲ類の結果とほぼ一致すると考えてよいだろう。

そして、第一軸に対するウエイトが女性よりも男性のほうが高いことが示されている。この結果は、女性は男性よりも「恋人ができない理由」を自らの意志に基づくものとしてとらえていることを示しているといえよう。すなわち、女性は、「恋人を欲しいと思わない」から恋人が存在しない、あるいは、「自分にとって最適の相手が存在しない」から自分に恋人が存在しないと思う傾向が強いものに対して、男性は、(恋人を欲しているかどうかは明確ではないが)、つくりたくても自分が社会的に望ましい特徴を有していないから恋人が存在しない、ととらえている傾向にあることが明らかになったのである。

さらに、重回帰分析の結果、第一軸へのウエイトは、孤独感や自尊心を予測しないが、第二軸へのウエイトが孤独感の高さや自尊心の低さと密接な関連を持つことが明らかになり、「恋人ができない原因」を「容姿」や「社会構造」といった固定的な属性に帰属することは孤独感の強さ、および、自尊心の低下と密接に関連する可能性があることが示唆されたのである。

ここでは、恋愛経験を持ったことのない大学生を対象として、「恋人が存在しない」理由をどのもうにとらえているかを探索的に解明してきた。大学生にとって、「健康な、楽しい」体験であると同時に、「深刻で、苦しい」体験でもあると考えられる恋愛行動をより組織的に検討する必要がある。

## 引用文献

- Anderson, C. A., & Arnoult, L. H. 1985 Attribution style and everyday problems in living : Depression, loneliness, and shyness. *Social Cognition*, **3**, 16—35.
- Anderson, C. A., Horowitz, L. M., & French, R. 1983 Attributional style of lonely and depressed people. *Journal of Personality and Social Psychology*, **45**, 127—136.
- エリクソン 小比木啓吾訳編 1970 自我同一性 誠信書房
- ハヴィガースト 荘司雅子訳 1958 人間の発達の課題と教育 牧書店
- 堀毛一也 1989 デート場面における社会的スキル 日本社会心理学会第30回大会発表論文集, 139—140.
- 飛田操 1989 親密な対人関係の崩壊過程に関する研究 福島大学教育学部論集, 第46号 (教育・心理部門), Pp. 47—55.
- Ickes, W., & Layden, M. A. 1978 Attributional styles. In J. H. Harvey, W. Ickes, & R. F. Kidd (Eds.) *New directions in attribution research*. Volume 2. New York : Springer-Verlag. Pp. 187—208.
- Jones, E. E., & Nisbett, R. E. 1972 The actor and observer : Divergent perceptions of behavior. In E. E. Jones, D. E. Kanouse, H. H. Kelley, R. E. Nisbett, S. Valins, & B. Weiner (Eds.) *Attribution: Perceiving the causes of behavior*. New Jersey : General Learning Press. Pp. 79—94.
- 楠見幸子 1987 女子短期大学生の恋愛感情体験に関する研究——交際目的による相違について——九州大学教育学部紀要 (教育心理学部門), **32**, 1, 65—70.
- 松井豊・戸田弘二 1984 青年の恋愛行動の構造について(1) 日本心理学会第48回大会発表論文集, 557.
- 永田良昭 1989 Social provisionの発生の対立・統合過程の実証的研究 昭和62・63年度科学研究費補助金 (一般研究C) 研究成果報告書
- Orvis, B. R., Kelley, H. H., & Buttler, D. 1976 Attributional conflict in young couples. In J. H. Harvey, W. J. Ickes, & R. F. Kidd (Eds.) *New directions in attribution research*. Volume 1. Hillsdale, New Jersey : Lawrence Erlbaum. Pp. 353—386.
- Passer, M. W., Kelley, H. H., & Michela, J. L. 1978 Interpersonal behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, **36**, 951—962.
- 下斗米淳・清水裕・山岡重行 1989 友人関係の進展を規定する行動期待の研究 日本グループ・ダイナミックス学会第37回大会発表論文集, 69—70.
- Sullivan, H. S. 1953 *The interpersonal theory of psychiatry*. New York : Norton.
- (Buhrmester, D., & Furman, W. 1986 The changing functions of friends in childhood : A Neo-Sullivanian perspective. In V. J. Derlega, & B. A. Winstead (Eds.) *Friendship and social interaction*. New York : Springer-Verlag. Pp. 41—62. より引用)
- 詫摩武俊 1973 恋愛と結婚 依田・大西・斉藤・都留・西平・藤原・宮川(編) 現代青年心理学講座 5 現代青年の性意識 金子書房 Pp. 143—193.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**, 64—68.

Don't love and reason go together ? :  
An analysis of explanations for not having a lover.

Misao HIDA

Thirty-three undergraduates who did not have steady described reasons why they didn't have a steady.

These descriptions were calssified into twelve categories (passivity, intent, idealization, lack of self-confidence, social undesirable personality, physical unattractiveness, social undesirable other apsects, immaturity, environmental problems, social structural problems, unrequited love, poor communication skill).

The main results were as follows ;

- (1) Male used poor communication skill category more frequently than female.
- (2) A multivariate analysis extracted two dimensions named "intent" vs. "social undesirability" and "fixed attributes" vs. "variable attributes".
- (3) There were strong correlations between the attribution for fixed attributes and loneliness and low self-esteem.

These results were discussed in terms of the relation between attributional processes and sex role expectations.